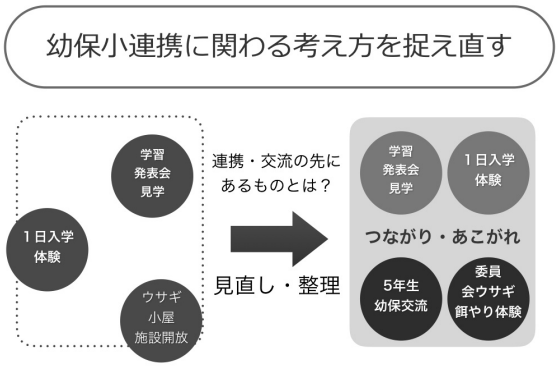
幼保小連携モデル事業　実践研究校

札幌市立清田南小学校

❶幼保小連携に関わる考え方を捉え直す



今回、幼保小連携モデル校のお話をいただいたことを機に、今までの取組を足元から見直すことにしました。視点を「何ができるか」から「どう育てるのか」に切り替えることで、一つ一つの取組の必要感が明確になり、子どもの育ちを中心に据えた再構成につながると考えました。

そこで、「連携・交流の先にあるものは何か」を問い直し、そこから得た「子どもの育ちの姿」を共有し合えるよう校内に向けて発信しました。今年度は「つながり・学びの連続性」と「あこがれと誇りによる育ち」を２本柱とし、取組・活動を整理し、年間の教育活動の流れに位置付けました。

協同性・道徳性・規範意識を生かす

◆つながり･学びの連続性◆

まず、「新１年生はか弱きまっさらな存在である」という捉え方を改め、幼保小連携推進協議会や幼稚園訪問から得た情報を元に、それぞれの園で育まれてきた「共同性や規範意識の芽生え」を小学校でも最大限に生かす指導を大切にしました。

具体的に述べると、スタートカリキュラムを「指導目標の下方修正」という一面的な捉え方をせず、実態や目指す姿に応じ、「上方修正」の必要性も考慮し、子どもにとって「期待と満足感」に満ちた学習となることを意識しました。そこで、各幼稚園・保育園での、「話を聞く」「集合する」「並ぶ」「並んで移動する」という指導の積み上げがあることを前提に、入学直後から、「整列」「素早い集合」を積極的に取り入れた体育の学習を体育館で行いました。子どもたちは、当然のように列を乱すことなく教室から移動し、おにごっこで楽しんだ後も指示通りの場所に素早くキビキビとした動きで整列することができました。多様な実態の新入学児童でしたが、自信に満ちた学校生活のスタートを切った子どもたちは、その後、運動会に向けてどんどん力を伸ばしていきました。

このように、各幼稚園・保育園で育まれてきた力は、学校で求める子どもの姿と一致しており、そこに連続性をもたせることを学校ぐるみで意識することが大切なのだと考えています。

◆あこがれ・誇りによる育ち◆

主体的に「よりよい姿」に向かい、自らを高めていく子どもを育むために、本校では年下の子どもが年上の子どもに対し、「あこがれ」の思いをもつことを、また、年上の子どもはその目線に対し、「誇り」をもつことを大切にしています。

幼保小連携の取組でも同様に、6年の歳の差のある子どもが共に関わり合うことで、心のつながりを生み、自己満足感に浸れる活動に再構成しました。

心のつながり・自己有用感を育む

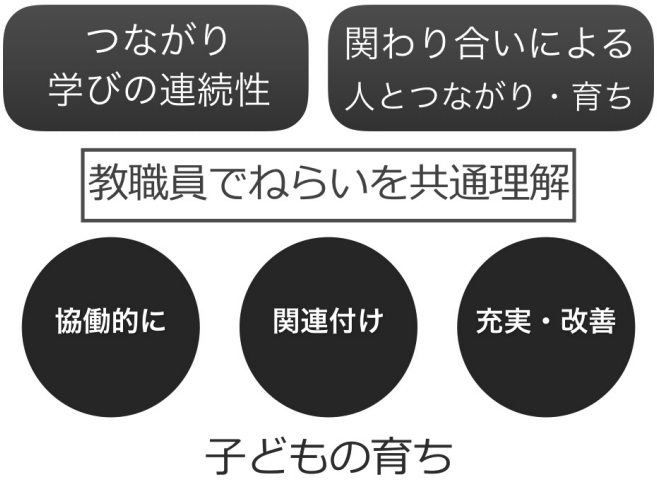
具体的な例を一つあげると、昨年度まで行なっていた「ウサギ小屋開放」（施設開放し、園の教育に役立てていただく）に見直しをかけ、児童活動部と連携し、飼育委員会が計画・運営する「ウサギエサやり体験会」としました。エサのやり方を教える活動を通して、子ども同士が関わり合い、「学校って楽しいところだな。」「お姉さんって優しいな。」「小さい子ってこんなに可愛いんだ。」「私のことをこんなに頼りにしてくれてる。」という思いを高めることができました。活動後には、ハイタッチで別れを惜しむ姿が見られました。優しいお兄さん、お姉さんの手の温かみ、じぶんに向かってくるまっすぐな澄んだ瞳から「あこがれ」と「自己有用感」を感じたに違いありません。

心のつながり・自己有用感を育む

◆ねらいを共通理解し、協働的な取組に◆

今回、連携の意味や目的を全職員で共通理解したことにより、多くの職員・部、学年から学校行事や学習と関連付いた多くのアイデアが寄せられ、協働的な取組となりました。また、取組後の話合いからは、次年度に向けた改善点が見いだされました。

担当者が主に考え、校内に向けて取組の協力を呼びかけるのでは、指導者の理解が進まず、なかなか特別活動や教科の学習に根ざした継続的な取組として結実しにくいと思われます。



自校の子どもの実態を十分語り、付けたい力・今、目指す子ども像を明らかにすること、それにより実際に子どもを指導する教師の本気度を高めること、そして事業のねらい・目的を共通理解すること、この３点が、取組を充実・改善させ、結果として豊かな子どもの育ちを生むのだと感じることができました。

❷具体的な取組

◆教育課程を生かした取組◆

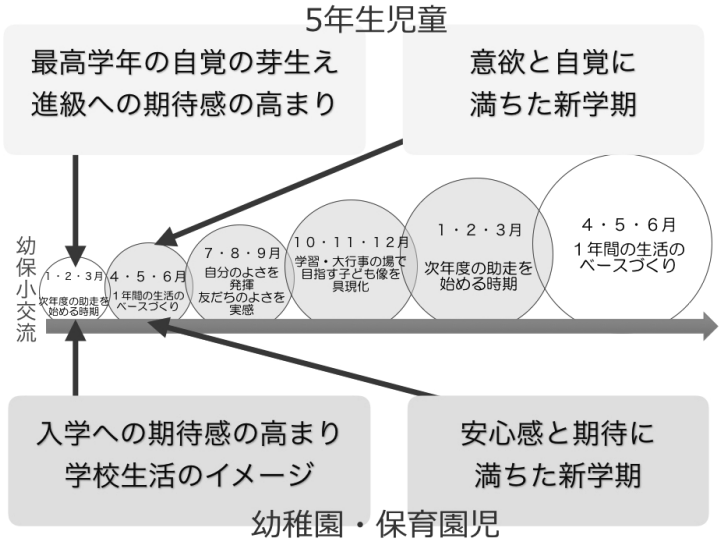
本校では、３学期を、次年度に向けた「助走の時期」と位置付け、次の学年を強く意識した取組を行なっています。特に、５年生は、４月から最高学年となり、行事や委員会、クラブ活動を引っ張っていく中心的存在となることが期待されます。また、園児にとっても、環境が大きく変わる入学を控え、入学を念頭に置いた様々な指導を行なっています。そのような中、子どもたちが新たな環境に急に投げ出され、そのギャップに戸惑うことのないような新たな取組の必要性を感じました。そこで、最高学年への自覚、入学への期待・安心感を高めることをねらいとして、４月から関わり合う関係にある５年生児童と年長児の交流の場を設けました。

具体的な取組①

教育課程を生かした取組

２・３月は「助走の時期」

・最高学年に向けて自己有用感を高める
・入学後のイメージを具体的につかむ
・活動を通して生まれる心のつながり



～1回目の交流～
「小さい子ってかわいい！」

今年度は、光の泉幼稚園、美しが丘幼稚園、南清田保育園と連携し、２回の交流の場を設けました。

１回目の交流の前に、担任から幼児との関わりについて話がありました。その際、「もし、鬼ごっこをして追いかけられたらどうしたらいい？」という問いに対し、「本気で逃げる！」「負けたくない！」と答えた子どもがいました。また、「年下の子は苦手だなぁ。」というつぶやきも聞かれ、説論や解説を越えた経験を通した直接的・実感的な学びが必要なのだと感じることができました。

実際に園児と関わると、どの子も「園児のあどけない純粋さ」「自分を頼りにしてくれる喜び」という初めて味わう感動に目を輝かせて活動していました。「勝負は勝負だ！」と言っていた児童も、園児を前にすると自然と程よいところで捕まってあげたり、笑顔でサッカーでのシュートを受け損ねてあげたりしていました。そこからは、「喜んでくれて嬉しい！」という思いと「もっと楽しませてあげたい」という意欲の高まりを感じることができました。

関わることの楽しさ・心のつながりを実感

～2回目の交流～
「どうしたいのかな？」

１回目の交流後、学校に戻り、自分たちの交流の様子を「園児への関わり方」「活動の内容」の視点から振り返り、「してあげたい遊びと園児がしたい遊びは必ずしも一致しない。」「園児が求めているものをまず第一に大切にすべき」という気付きを生むことができました。それを元に、２回目の交流に向けて計画を練りました。

最高学年としての手応え・喜び

２回目の交流では、活動を①学校案内②カード作り③グループ遊びの三部構成にし、対話を通して少しずつ距離を縮めていけるよう工夫しました。

5 年生児童の様子からは、より子どもの目線に下がり、園児の表情や言葉、動作から心の中を伺う姿が見られました。「次、何しよっか？」「これしたいの？」というお兄さん・お姉さんの優しい問いかけに、緊張していた園児も心を開き、安心して自分の思いや希望を伝えることができました。

入学時の1年生との交流

自分の手をしっかりと握ってついてくる園児を見つめる５年生は、最高学年としての手応えと喜びを噛み締めていたに違いありません。

～4月からの活躍に向けて～
「早く入学してこないかな」

この育ちが、４月からの１年生との交流（1 年生のお世話という言い方は使用していません）をより意欲的なものに変え、やがては異学年交流の中心的存在として学校を引っ張っていってくれると期待しています。交流後の子どもは、「早く入学してほしい」と口々に話していました。また、別の小学校に入学する園児に思いを馳せ、「楽しく元気に過ごしてほしい」と願う子もいました。

このような高学年の成長が本校の伝統「あったか清南」という校風づくりを一層高め、それにあこがれる新入学児童が、やがては、たくましい６年生になっていくと考えています。

◆学校の特色を生かした取組◆

札幌らしい特色ある学校教育「生涯にわたる学びの基盤【読書】」づくりを目指し、本校では読書指導・活動に力を入れています。協力的な司書・ボランティアの方々にも恵まれ、児童はもちろんのこと、地域の方々から親しまれ、利用されています。

「札幌市の学校教育の重点／札幌らしい特色ある学校教育」を参考に、読書における学びの系統化を念頭に、地域ぐるみでの読書習慣づくりの具現化に向けて着手し始めました。

具体的な取組②

学校の特色を生かした取組

学校開放図書館の活用

- 協力的なボランティアの方々が多数
- 地域に親しまれ、利用者が多い
- 入学後の読書活動につなげる

～一緒に楽しもう！～

全校一斉読み聞かせ

本校では毎年、子どもが興味のある本を選び、読み聞かせを聞く会を開いています。そこは、新たな本との出会いが生まれる場であり、読み手の演出から心動かされる場でもあります。

ぜひ、近隣の幼稚園・保育園の園児にもその経験をと考え、お声かけさせていただきました。今年度は、日程の都合上、参加はかないませんでしたが、「次年度はぜひ！」とのお返事をいただいたので、すでに「幼保小連携カレンダー」にも登録し、実現に向けて動き出しています。

～こんな活用も～

開放図書館に通い、学校に慣れる

「引っ越して間もないので、なかなか仲のよい子ができなくて・・・」という保護者の方の思いをくみ、近隣の幼稚園が声かけしてくださったことをきっかけに本校の開放図書館に本を読み来た子がいました。それを見かけ「よければ少し通ってみませんか？先に学校に慣れておくのもいいですよ。」とお誘いをしたところ、何度も足を運ぶようになり、挨拶もするようになって来ました。

～校種間を越えた「育ちの姿」～

このように、校種間を越えて、施設・人材を積極的に活用し、地域ぐるみで子どもの力を伸ばすことに可能性を見出し、取り組み始めました。そのために、単発的な取組の日程調整に終始するのではなく、「読書活動での指導目標をどこに置いているか」「１日どのくらい読書の時間を取っているか。」「どのような指導をしているか」など、発達段階に合わせた指導の実態を具体的に交流し合うことが大切だと感じました。

施設・人材の活用

学びの連続性
豊かな感性

地域ぐるみの読書習慣づくり

協働的に

目指す姿を明確に

❸成果と課題、そして･･･

◆ 成 果 ◆

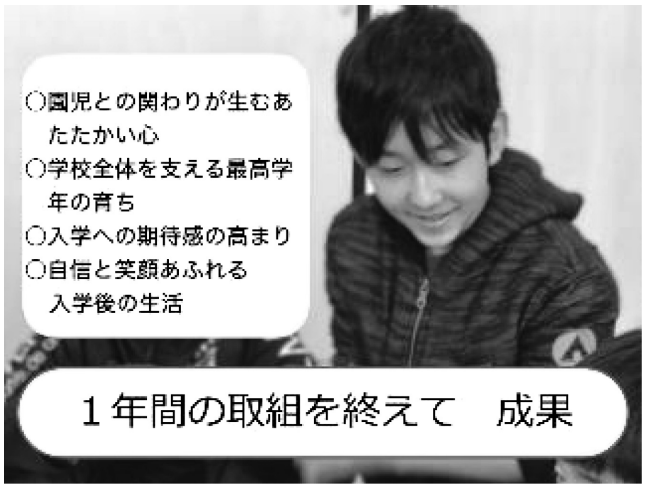
事業の目的と本校の児童の実態や育てたい力を関連付けて発信したことで、今回の幼保小連携事業を始め、学校に関わる様々な教育施策は、目の前の子どもの課題や目指す姿と直結しているという意識や理解が校内で深まりました。それが、協働で取り組む体制づくりにつながりました。

また、子どもの育ちとしては、以下の３点が挙げられます。

○５年生→最高学年に向けた意識と自覚の育ち

○１年生→自分のよさを発揮できる喜びと自信

○新入学児童→入学に向けた期待感の高まりや不安の解消



◆ 課 題 ◆

見通しをもった早めの連絡・調整の他に、今後の連携のカギとなってくる校種間の教育課程の円滑な接続についてじっくり語る場の必要性を感じました。

そこでは、アプローチカリキュラム・スタートカリキュラムの見直しはもとより、３＋６＝９年間で中学校につなぐ発想にたち、より大きな視点から互いの教育課程の改善・充実に生かしていきたいと考えています。また、施設・人材を含めた園・学校の特色を生かした新たな学習の可能性を求め、連携を深めていきたいと考えています。

◆そしてもう一つ･･･◆

最後にこれから改善・充実させていきたい取組、あるいは挑戦していきたい学習のアイディアをいくつかご紹介いたします。

●スキー山開放　→　生活科で交流へ

●遊んじゃおう国招待→5 年生が案内係に

●交通安全パレード→参加呼びかけ

●わかば学級事前体験→意図的な交流学習へ

「連携の先にあるもの」すなわち「育ちの姿」を共有し合い、子どもを豊かに育てていくよう今後も取組を進めていきたいと考えています。